

「活字」と向き合い 超一流のエンジニア になろう!

高松キャンパス図書館長
田口 淳



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。憧れの高専での学生生活に夢を膨らませていることと思います。また、在校生の皆さんも新たな決意で新年度をスタートされていることと思います。新年度に当たりまして、より豊かな学生生活への一助となればと思い、私が本という「活字」と向き合うようになった拙い経験を紹介したいと思います。

私の本との関わりは、大学生として安アパートで一人暮らしを始めた時の隣人N君との出会いがきっかけでした。彼は、私に読書への大きな触発を与えてくれました。N君に誘われラーメン屋でアルバイトを始めた私は、毎月アルバイト料が入った翌日には、彼と二人で空のバッグを2〜3個携え、電車で揺られて約2時間。東京の八王子から神田・神保町に行き、そこで朝から閉店まで古本屋巡り。あの何とも心落ち着く古本の匂いに酔いしれながら至福の時を過ごし、帰りは互いの掘り出し物を紹介し合ったあと、電車の中では読書に夢中になって二人して乗り過ごすことも何度かありました。

そのN君の読書の仕方には、3つの特徴がありました。一つ目は、「頭の体操にいいんだ」と言いながら、いつ

も3時間ごとに全く違うジャンルの本を読むことでした。二つ目の特徴は、彼のカバンには常時3種類の本が入っていることでした。一冊は「電車で立ったまま短時間でも読める本」、二冊目は「少し時間がある時に、多少周りの雑音があっても読める本」、三冊目は「時間が十分ある時に、静かな環境で集中して読むための本」。その話を聞いてから、私は今でもこの3冊を持ち歩くようにしています。そうすると、時間がなくて本なんか読む暇がないと思っていた私でしたが、気がつけばいつも本を手にはしている自分がいます。三つ目の特徴として、1冊読み終わるごとに、簡単なあらすじや感想、そして自分の考えなどを「読書ノート」に書いていたことです。彼は時々それを私に読ませてくれて、共感し合ったり、議論を戦わせたりしながら、互いに喜びを感じていました。余談になりますが、もう20年近く前になりますが、以前本校にも「読書会」がありました。それは、学生と教員の有志15名程度が放課後に集まり、最近読んだ本の感想を紹介し合って、楽しいひと時を過ごすといったものでした。しかし、皆の共有時間が取れなくなったためだと記憶していますが、この「読書会」は、残念ながら数回で終わってしまいました。

最近は特に活字離れが進んでいると言われています。確かにテレビやマンガはあらかじめイメージが与えられているので、視聴するのはとても楽です。一方、活字はそれなりの努力が必要となります。その努力を惜しまずじっくり活字と向き合う中で、「想像力」や「思考力」が伸びていくとも言われています。超一流のエンジニアとして社会に貢献しようとされている皆さんには、是非この高専時代に活字と向き合いながら、豊かな人間力を育みつつ、充実した学生生活を送っていただきたいと願っています。

教員によるエッセイ

図書館の思い出

私が図書館について考えるとき、一番に思い出すのは母校の大学の図書館である。修士課程に進学してから3年ほど、その図書館でバイトしていたためだ。特段、図書館を愛していたわけではなく、ましてや図書館職員の仕事に興味があったわけでもない。ただ、時給が良かった。さらに、学内という立地条件や、勤務時間のことなどで色々と融通が利くことから、研究活動に勤しむ貧乏学生にとっては最高のバイトであった。

いざ働き始めてみると、色々なこと(モノ)が見えてく

る。なぜか大量に所蔵されている同一名の図書、数十年分の埃を被っているであろう図書、誰が読むのかロシア語の雑誌、などなど…。色々なヒトも見えてくる。ほぼ毎日同じ席をキープして勉強している学生、特定の雑誌の最新号を読むためだけにやってくる学生、定期的に来て雑誌のバックナンバーを大量に借りていく学外利用者、などなど…。失礼ながら、そんな利用者の皆さんを観察しながらあれこれと考えるのが一つの楽しみでもあった。

私が勤務している期間には、色々な変化もあった。一



建設環境工学科
長谷川 雄基